# Re Start

闇灯凛音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅ　Ｓｔａｒｔ

【Ｎコード】
Ｎ９７２５Ｑ

【作者名】
闇灯凛音

【あらすじ】
不幸な事故により主人公、水無月陸はいきなり死んでしまう。
しかし、夢、あるいは薄れゆく意識とも言える中で、陸は１人の少女からチャンスをもらう。
何のためのチャンスか分からないまま、こうして陸の２度目（？）の人生がスタートした。

# 序章（前書き）

言葉の使う場所が分からない等、至らぬ点が多いと思いますが、とりあえず完結まで頑張ります。

# 序章

「おい！大丈夫か！」
近くで誰かが叫んでいる。しかし、何故かその声は遠くの方で聞こえた気がした。
「早く！早く救急車を！」
大勢の人がこっちへ走ってくるのが見えたと思ったら、今度は視界が閉じようとしている。
（なんだ？すげぇ・・・ねむ・・・い）
言葉に出来ずに視界は閉ざされ、真っ暗になった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

（ここは・・・？）

相変わらず真っ暗の世界。まるで、自分の意識だけが起きているような、はたまた、夢を見ているのか？
分からない。
そもそも、自分は今どこに居るのだろう？自分は立っているのか？寝ているのか？それすらも分からなかった。

「やぁ」

幼ぃ（？）女の子の声が聞こえた。誰の声だか分からないが、それは自分に向けられていることがなんとなく分かった。

（誰だ？）
「君を助けてあげようと思ってね」
（俺を？俺に何が起こったのか知ってるのか？）
「知ってるけど、教えないよ？それよりさ、今ならまだ間に合うよ？君にとってはこれがラストチャンスだからね」

この主無き声は何を言っている？まだ間に合う？ラストチャンスってなんだ？
・・・まぁいいか。夢なら起きれば忘れるだろう。なら俺が起きるまでの間、暇つぶしに付き合ってもいいやと思い、答える。

（この真っ暗をなんとかしてくれるチャンスなら欲しい）
「そうこなくちゃね。」

少女の返事と共に、小さな光の玉が１つ生まれた。やがて光は大きくなり、闇を照らしていく。同時に意識が薄れていく自分。

じゃ、向こうでまたね。

最後にかろうじて聞き取れたのは、そんな言葉だったような気がした。

## 序章（後書き）

なるべく定期的に更新をしていきたいと思いますが、今のところはちょっと不定期になっています。すいません

## １－１、訊ねてきた少女（前書き）

序章は短くなってしまいましたが、本編は出来るだけ長めに書いて行きたいと思っていますですハイ

## １－１、訊ねてきた少女

「ん・・・朝か・・・・・・よっこら、うお！？」

目を覚ました俺はベッドから起き上がろうとして、起き上がれなかった。と言うか、体が金縛りにあったかのように動かないのだ。自分の手足が何かで固定されているようだった。なんじゃこりゃ？

しかし、追加で驚いた事がある。

「ど、どこだここ？」

白い天井に白い壁、１つしかない窓にやはり白いカーテン。全てが白一色の部屋は清潔感たっぷりなイメージを浮かばせた。同時に消毒液のような匂いが纏わり付く。

どうやら病院のようだった。

「外に居たはずなのになんで病院に居るんだ？俺、何かしたっけな？」

そう思っていると、おそらくドアがあるであろう方向からコンコン、と優しくノックの音が響いた。起きているのに居留守するのはおかしいし、何より何故自分が病院に入院しているのかを聞き出すチャンスだと思い、応対する。

「どうぞ～」

バン！！、先ほどの優しいノックはどこへやらという様に、勢い良くドアが開いた音が聞こえた。音の大きさにビビる。

そしてナースと思わしき女性の登場・・・かと思えば、俺を見た

途端に口元を両手で押さえ、バタバタと出て行ってしまった。

「なんだなんだ？えらく騒がしい人だな？」

そう思いながら俺は、夢での出来事を断片的に思い出す。姿の見えない女の子の声、ラストチャンスの意味、一方的にされた再会の約束等々。しかしどう考えたって彼女の言いたかった事が見えてこない。そもそも夢なんて目が覚めた時にはほとんど内容は忘れてしまっているものだ。欠片を持ってたとしても、所詮欠片であり、全体を見ることなんて出来ない。

「最後まで姿見せなかったな・・・。なんかまた会うような事言ってたけどまぁいいか、夢なんてそんなもんだ。それに次に夢見たからって続きから～、とかないしな。あー退屈だ。」

と、つい漏らした時。

「先生！早く来てください！」

遠くからナースの声と数人の慌ただしい足音が聞こえてくる。先生と言うからには医師なのだろうが、「病院内は静かに」と呼びかけている人間が率先して破っていれば世話ないなと思う。

再びナース及び医師が病室へ入ってくる。

「ここです先生！意識が戻っているんです！」

「なんと・・・彼には天使でも付いているのか？」

連中は俺が起きたことに驚愕しながらも喜びを上げている。俺にとっては普通に寝て起きた程度の実感しか湧いていないのだが。

「あの、俺に何があったんですか？それと、この状態じゃ起き上がることも出来ないんで解いてほしいんだけど？」

何がそんなに嬉しいのかと訊ねる。

それに対し、医師は少し乱れた白衣を直しながら答えた。

「騒がしくしてすまないね。なにせ君は絶望的な状態でここまで運ばれて来たから。君には突然の事で頭の整理が付いていないようだね、実は・・・」

「その説明はボクがするよ、お医者さん！」

医師の説明は突然の介入者によって止められる。一体誰だろうと俺は声の主を探す。やがて立っている医師たちの間をすり抜けて出てきたのは・・・。

「女の・・・子？っていうかゴ、ゴ・・・。」

「わかった！ゴスロリじゃない？」

「そうそれ・・・ってそうなんだけどそうじゃない！」

「意味わかんないよー？」

「えっとな、君は誰？もしかして部屋を間違えてないか？」

「ボクはアリス。部屋もここで合ってるよ？なんせ君の命の恩人だからね！」

「・・・すまん、俺も意味が分からなくなったんだが？」

純白のゴスロリを着た「アリス」と名乗る少女だった。

## １－１、訊ねてきた少女（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございます。
少しは長くなったでしょうか？これくらいの長さが今の精一杯なのですが・・・もしかして全然長くなってない？

## １―２、少女の正体と相応の代償（前書き）

１―１では長めに出来たと思っていましたが、実はそうでもなかったみたいですね。

## 1－2、少女の正体と相応の代償

「まぁまぁ、とりあえずボクの話を聞けば思い出すと思うよ？あ、お医者さん達は出て行ってくれないかな？」
「しかし君、私たちも彼に聞きたいことがあるんだが・・・うぅ」

アリスはうざったそうに医師たちへ視線を向ける。連中は視線に乗せられたアリスの意思を感じ取り諦めたのか、ぞろぞろと部屋を出て行く。
俺も実は既に諦めていたりする。目が覚めてから訳の分からない状況が続いたせいか、変な耐性が付与されたらしい。

「・・・分かったよ、聞くよ。アリスサンは何を話しに来てくれたんですかね？」

ため息混じりに俺は言う。

「まずは今の状況説明からしておこうかな？」
「それは真面目に助かるな。実は一番欲しい情報だったんだ」
「そっか～！じゃあさっさと言うとしようかね」
「おう」

そしてアリスはとても可愛らしい笑顔をして、ぶっ飛んだ事を言い出した。

「陸君。君は事故で1度死んだよ」
「！？」
「でもボクと契約を交わしたことで、ボクが君に仮の魂を入れて

あげたんだよ。だから君は今こうして生きてるというわけだね！うん、ボクの説明分かり易い！」
「分かるかぁ！！！」

誰だって怒鳴りたくもなるだろう。
今の説明で俺に何を納得させようとしたのかコイツは！俺の欲しい情報が何一つ含まれてないことにがっかりだ！事故で俺が死んだ？契約とやらで仮の命を貰って生きている？
俺なんかよりお前の方が入院すべきだろうよ、と言ってやりたいところだが、話が前進しないと思い我慢。

「なんで怒るのさ・・・」
「ありえないことをお前が言うからだろうが！」
「じゃあ何が知りたかったの？」
「・・・俺がなんで病院に運ばれているか、だ」
「そこからなの！？めんどくさいなぁ」
「知ってるなら早く言え！」

アリスは渋々といった顔持ちで話し始めた。説明しに来たって言ってるくせになんでそんなにだるそうにするのか・・・。

「確認くらいは取ってあげるから、返事してよ？」
「ああ」
「まず、陸君は外出中、信号無視の車に撥ねられたんだよ。運悪くね。」
「ふむ」
「で、車に撥ねられればかなりの確率で死んじゃうでしょ？当然陸君は即死コースだったのさ」
「そうなの、か？」
「うん、ボクが来た時には君の魂は既に体から消えかかってたか

らね、さっき言った1度死んだって言うのがソレだよ」
「なっ！？」
「あーのど渇いた、ちょっと休憩」

最初の説明はまともな説明だったのに何かまたおかしな方向に話が進んでる気が・・・。っていうか手ぶらだったのにどこから1リットルパックのコーヒー牛乳を・・・？四次元に繋がる不思議なポケットでも持っているのだろうか？
とりあえず、質問は後に回すことにした。なんせアリスの口からまだ出てくるであろう意味不明な説明内容を脳内で処理するのに大幅に時間がかかってしょうがない。
一息つくには早すぎるだろうと思いながら、俺はアリスに続きを言うように促した。

「で、完全に魂が離れてしまう前に、ボクがすこし干渉したのさ。君が目を覚ます前に見た物が・・・って夢みたいなもんだし、あんまり覚えてもないかな？」
「い、いや。断片的になら・・・チャンスがどうとか、また会う、みたいな？」
「おお！意外にキーワードは覚えていたのね？」
「お前が見せた夢なのか？」
「そのとーり。ボクのスーパーでワンダホーな力でね。他人の魂に呼びかけて「生きるか死ぬか」のチャンスをあげる事が出来るんだ。ボクだけの、特別な力だよ」

特別な力。そう言うアリスの表情は、どこか悲しげに見えたのは俺の気のせいだろうか。超能力の類のように聞こえるが、アリスの持つ力はなんというか、重みのようなものが違うように思えた。アリスは話を続ける。

「君はボクのあげたチャンスを生きる方へ使った。だから外見は絶対安静の状態でも呼吸器無しで喋れるんだよ。」
「・・・」
「どうかしたのかな？まさかとは思うけど、まだ理解できないなんて言うつもりなの？言っておくけどボクにはこれ以上の説明は出来ないんだけどね？第一面倒だし」
「いや、説明はもういい。不思議だけどなんか分かったよ。とりあえず、俺は・・・お前に助けられたんだな・・・その・・・・ありがとな」

最初の時点じゃ頭に血が上って理解するのは無理だと思っていたが、幸を成したのか途中からは割りと落ち着いて話を聞いていたようだ。だが同時に不幸も成していたのか、礼を言うのに少し時間がかかっていた。その時の気持ちなんぞ思い出したくも無い。

アリスは俺が納得していることに気づいたのか、再び笑顔になった。正直この笑顔は嫌いじゃない。
俺は話が一段落したとみて、アリスに話しかける。

「そんないい力持ってるなんて、まるで神様か天使だな」
「そりゃ、ボク天使だからね。当然じゃない？」

・・・・・うん？今目の前の少女はなんと言った？

「天・・・使？」
「そだよ？あ、まさか信じてない！？陸君、ボクだって普段は隠してるけどさ、証明できる物くらい持ってるよ？ほらっ」
「なんだよ、免許でも持ってるって言う・・・・な！？」

そう言って俺に背中を向けるアリス。よく見ると、純白のゴスロ

リにはデフォルトで付いているのかと錯覚するくらい、穢れなき白き羽が生えてきた。しかも頼んでも無いのにその羽は更に成長し、ついにはアリスを包み込めるまでの大きさになった。「羽を伸ばす」と言う言葉をそのまま見せられた瞬間だった。

「どう？なかなか立派だと思わない？残念ながら空を飛ぶことは出来ないけどね。」

「え？あ、ああ・・・。と、とりあえず隠してくれないか？」

「え？なんで？」

「いや、なんとなく」

アリスは首を傾げながら羽を戻す。なんで戻させたかというのは、いきなりそんな物を見せられても反応に困る事というのが半分以上なのだが、アリスにいろいろ説明するのが今の俺には難しい事だというのを察してくれると嬉しい。

しまい終わったアリスは再び向き直ると、「あ、まだ話すことあった」と言わんばかりにポンっと手を打った。この上まだ何かあるのかと、俺は未だ脳内フル稼働中。

「じゃあそろそろ契約代償の話なんだけど」

「代償・・・？」

いきなりの話題を出すアリスに俺の反応はやはり付いていけない。というか天使は本来無償で助けてくれるものなんじゃなかったのか？（あくまで俺の考えだが）

そんな天使が代償を求めてきている・・・やはりお金なのだろうか？いや、一度死んだ者を生き返らすという医学では太刀打ち出来ない程の事をしたのだから「寿命を半分よこせ」とか言い出すのだろうか・・・。

俺のそんな考えをよそにアリスが求めてきたものは、拍子抜けしたものだった。

「ボクのお願いを叶えてくれる、というのでどうかな？」

「え？」

そんなことでよかったのか？と逆に聞き返したくなるような内容だった。俺の天使イメージが再び蘇ってくる。ああ、天使ってやはりいるのか。

「陸君にはね、どこかに散らばったボクの魂の欠片を集めてきて欲しいんだよ」

「！？」

「実はね、ボクはそのためにこの世界にきたの。でも一人だと探すの大変だし面倒でしょ？そんなときに君を見つけてね、手伝ってもらおうと思ったんだよ。あ、言っておくけど契約解消は君が生き返った時点で無効になってるからね？」

「はぁ！？」

前言撤回。やはり天使なんていなかった。つまりあれか、一人で探し物をしているときに偶然そこで事故にあった俺を助けて恩に着せよう、と。

既に契約の取り消しが無理なことを聞いた時点で、俺はがっくりと肩を落として、せっかく生き返ったのに面倒な事になったと深いため息を付く。

「ちなみにその散らばった欠片なんだけどね陸君。この世界にあるのは確かなんだよ。でもどんな形をしてどこにあるのかまでは分からないんだ」

「それって大問題だろ！なんでそんな最重要的情報が綺麗に抜け

てるんだよ！」
「まぁまぁ落ち着いてよ。時間はいっぱいあるからね、ゆっくり行こうよ？まぁ、あんまりのんびりされちゃうとちょっと困っちゃうけどね」
「はぁ・・・。お前、もっと情報を集めてからきても良かったんじゃないのかよ？」
「あはは・・・。魂に詳しい友達はいなかったからねぇ・・・」

ポリポリを頬をかくアリス。少しは情報を探して動いていたらしいが、そんなものは定かではない。今日何度目のため息を吐いたか数えはしないが、俺はもう一度ため息を付き。仕方なくアリスに協力することを頭に入れた。

「とりあえず、さっさと退院しちゃおう？お医者さんにはボクから言っておくからさ！」
「いや、待てって。手足が包帯ぐるぐるの上に拘束されてるんだから当分は安静に・・・」
「それも踏まえて、なんとかしてあげるよ。ちょっと触るね？」
「なにを・・・うわ！」

アリスが俺の腕に手を置いた瞬間、アリスの手が淡い光を帯びた。それと同時に触れている部分から何か暖かなものを感じる。手の温度かと思ったが、どうやらそうではないらしい。優しさを表すような暖かさが全身に行き渡っていくのが分かった。

「治った・・・」
「これでよし！もう全部治ってるから退院できるね？お医者さんに話つけてくるよ。それと病院をでたらここへ来てね？」
「おい！まさか今の治療にも代償が付くのか！？」
「サービス♪」

目的地が書かれているであろう紙をテーブルに置いて、アリスは部屋を出て行った。部屋に残された俺は置かれた紙を見つめた。

「一度死んだ、か。実感なんてこれっぽっちも湧かないんだけどなぁ。まぁ退屈な状態から抜け出せそうな気はするけどさ・・・ってか、あんな頼りない感じでホント大丈夫かよ・・・？」

考えたところでいい案が浮かぶわけもない。そう思いながら俺はとりあえず、こちらへ向かっているであろう医師の到着を待った。

## １―２、少女の正体と相応の代償（後書き）

誤字脱字くらいはなんとか無くしていると思っていますが、読みにくい部分は相変わらずかもしれません。申し訳ないです。

アドバイス等ありましたらビシバシどうぞ！

## 1―3、出発（前書き）

出来るだけ長めに書いていきます！

## 1―3、出発

俺が病院を出たのはアリスが出て行ってから1時間後だった。
なんせ、普通は1ヶ月以上も入院しなければいけないような傷が、アリスのサービスにより一瞬で完治してしまった為、拘束が解けてからかなりの質問攻めにあっていたからだ。
降りかかる質問に「ノーコメントで」と、国会議員が使ったらその人の立場が後々悪い方向へと向かうと巷で噂の最終奥義を何度も叫び、上着とアリスの置いていったメモを掴んで飛び出した。

「はぁ、はぁ。全くひどい目にあった。」

外に出ると、今度は待ってましたとばかりに太陽の日差しが暑く眩しく、よろけそうになる。太陽よ、その時期はまだ当分先なのだが？

「あ、紙」

ポケットを探り、アリスが残したメモ用紙を取り出して、見る。そこに書かれていたのはどんなに地図を描くのが下手だと自負している奴でも、この紙に書かれた斜めに直線一本だけの地図を見た途端、忘れていた自信を取り戻す錯覚を起こさせる程の馬鹿げている物だった。
断言しよう、コレは地図ではない。

せめてもの救いだろうか、書かれた線を軸にするかのように「ヘアサロン」だの、「パン屋」だのと、店の名前が書かれている。ど

うやらこの近辺にある店の名前を片っ端から書いたみたいだ。
ならばと俺は一気に目線を直線の終わりまで持っていく。もし本当に片っ端から書いているのなら、わざわざ店を1つずつ確認しながら行くよりも、目的地に近いところにある建物を見ればいい。

「・・・・・」

目線が捕らえた一つの名前「ホテル☆キュート」。斜線の近くではなく、まだ伸びるであろう線自体をその名前が塞いでいる。これはもはや目的地ではないかと思うがいかがだろう？
しかし、焦ったのはそのことではなく、目的地の名前である。
一見普通のビジネスホテルの外装だが、その中身はカップルで行けばより親密な時間を過ごすことが出来るという、迂闊に入ると多大な誤解を招く、ある意味「絶対不可侵領域」だ。（当然だが俺は断じて入っていない）

「ないな、うん、ない！」

しかし、何故かアリスならやりかねないという思念がよぎる。こんなところで頭を抱えても何の解決にもならない訳なのだが。

「と、とりあえず近くまで行こう」

数十分後・・・。
というわけでやってきたのだが、そこから足を踏み出すのがどうしてもためらう。そりゃそうだろう？誰だって、知り合いが居るかどうか、という名目でもおいそれと踏み込めるような場所ではないはずだ、多分。俺は再び頭を抱えてしゃがみ込む。

「どうする・・・どうする！？」

「陸君。一人で何をヒンドゥースクワットやってるの？生き返った時に後遺症でも出たの？」

「うわ！アリス！？」

急に後ろから声をかけられ、振り返る。そこにはコンビニの袋を大事そうに抱えたアリスが、頭に「？」マークを浮かべそうな顔で立っていた。

「全く、ちゃんと地図書いたじゃない。それなのに迷子になるなんて・・・」

並んで歩く俺に、上目使いで呆れた目線を送ってくるアリス。呆れたのは俺の方だ、と言い返したかったが、そこは大人の気遣いということでぐっと我慢する。

「いやいや、迷ってたのは道じゃなかったんだが・・・」

しかし結局、目的地はあのホテルでは無かったため結局迷子となるのかとため息を吐きそうになるが、逆に目的地があのホテルじゃなくて良かった、という安堵感もあったため、気落ちはしない。

「何買ってきたんだよ？」

コンビニで袋詰め大会でもあったのかと思うくらい大きな袋を抱くようにして抱えるアリスに問う。聞かれたアリスは何やら神妙な顔つきになって答えた。

「よく言うじゃないの、糖分は頭の回転を早めるとか、疲れた時には糖分とか。きっと長い戦いが待っているに違いない・・・って、あ！」

さっと袋を取り上げて中身確認。まぁ話の内容からしてお菓子だろうと確信に近い予想する俺。袋に入っているのは以下の物である。

お菓子袋。
お菓子袋。
お菓子単品。
電池。
お菓子単品。

「お菓子ばっかりじゃないか！太るぞ！の、飲み物は！？アリスは飲み物無しでこの大量のお菓子を相手に！？ってか電池！お菓子以上に電池の存在が気がかりだ！そんなイレギュラーな組み合わせなんて予想すら出来るかぁ！！」

ちなみにお菓子袋のラベルには「大満足の９９個入り！」という文字が躍るように書いてある。

「どこの勇者さん御用達の品！？」
「ボクは太らない体質なんだよー。それに陸君にもあげるんだから、はい電池」
「いらねぇぇぇぇ！」

アリスは笑顔で電池を俺にくれた。それと同時にアリスの足が止まる。
目の前にあるのは高級そうなマンション。どうやらここが本来俺がたどり着かなければならない目的地らしい。あの意味不明な地図はなんだったのか・・・。
実は病院に来たときから遊んでいたんじゃないだろうかと、俺がジト目でマンションに入っていくアリスを見ながら後を追った。

「ここだよ！さ、入って入って！」

１９３号室。ここがアリスの拠点らしい。背中を押されて強引に部屋に踏み込んだ俺は、流石高級マンションと言わざるを得ない内装に、素直に凄いと思った。

「さてとっ、まずはお菓子タイムといこうよ陸君！」

「さっき、疲れた時には～って言ってなかった？」

「疲れる前に食べるとより美味しく感じるのだよっ！うわわ！」

そう言うとアリスは強引にお菓子袋を破り、盛大にぶちまけた。スナック菓子じゃ無くて本当に良かったと思う瞬間である。

「で？アリスの魂はどうやって見つけるんだ？というかそれ以前に、魂に形なんてあるのか？」

「形と言うか、光だね。小さな光かな？」

お菓子に夢中なのか、アリスは俺に目もくれずに答える。

ここで今まで気になっていた事を俺は聞いてみる。

「魂を探してるって事はお前も、その・・・一度死んでる、のか？」

「ううん、死んではないよ。まだ、ね」

別に話してもいい内容だったのかアリスは普通に答える。だがその時のアリスの視線は俺をしっかり捕らえていた。

「天使はね、人とは魂の大きさが違うんだ。当然大きいほうが天使ね？ボクもそれなりに大きいんだよ。でも天使として世界を飛び

まわれる前に、失敗をしたの」

いつの間にか持っていたお菓子を置いて、アリスは真剣な顔になっていた。

「まだ天使になる前に、一緒に遊んでた友達が死んじゃってね。周りには助けは居なかったからって言うのもあるけど、自分の力で助けてあげたいっていうことの方が強かったかな？迷わず助けたよ。結果は成功した。力を使うとね、自分の魂を少し相手に分けるって形で相手を生き返らせるんだよ。でもその時のボクには、力のコントロールなんて出来るわけなかったからね。半分以上持って行かれちゃったわけ」

「・・・俺の時にも魂を使ったわけか」

「今はベテランだよ？」

俺は生き返るとき、ノリで返事をしたことを思い出して、自分を殴りつけたい衝動に駆られた。

「悪かったな。俺なんかに魂を使わせちまって。本当に、すまなかった」

彼女は自信を犠牲にしてまで俺を生き返らせた。その事を知らずに俺は軽く承諾したという大きな自責から謝罪をする。

「あ、謝ること無いよ！天使って常に人助けがお仕事みたいなものだし、天使はボクだけじゃないんだからさ」

「そ、そうか・・・ありがとう」

俺が更に礼を言うと、アリスは「いいからいいから！」と慌てて両手を左右にブンブンと振った。

コイツが天使で本当に良かった、と俺は今更のように生き返った実感を得る。

「それに、ボクを手伝ってくれるんでしょ？それなら陸君がボクを助けてくれる事になるからチャラになるよ！」

「ああ、借りはちゃんと返すさ。手伝わせてくれ」

「うむ！じゃあさっそくだけどね？陸君にはまた出かけてもらうよ」

アリスは一枚の大きめな紙を取り出して広げた。どうやら今度は本物の地図らしい。アリスが指である場所を指した。その場所はマンションの近場みたいだ。

「ここ！ここに公園があるんだけどね？近くの住人たちの間で、夜にそこへ行くと怪しげな光が見れるって言う噂があるみたい」

「もしかしてその光って・・・」

「魂の欠片かもしれないね、今夜辺りに行ってきてくれるかな？」

「ＯＫだ、アリスは？」

「う・・・ボクはほら、お菓子食べないとだから」

「まだ食うのか！？」

そんなやり取りをしているうちに、一旦準備のため家に戻ることをアリスに告げる。しかしここでも予想もしない答えが返ってきた。

「ああ、陸君の部屋なら隣に取ってあるよ！これ、鍵ね」

「いつの間に！？ってかここ高いだろ！部屋の維持できないぞ！？」

「ん？お金ならボクが払うことになってるから大丈夫だよ？」

「・・・・・」

「サービス、だよ♪」

アリスさん、サービスの意味分かってます？

そんなわけで、二度目の人生が新しい住処で再出発した俺であった。

## 1―3、出発（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます！

途中からシリアス展開に力を入れてることが分かり、慌てて軌道修正を施しました。

間に合っ・・・てないでしょうね、コレ。

## １－４、魂の輝き（前書き）

毎度ぐだぐだですみません・・・

## １－４、魂の輝き

アリス宅から隣の１９２の番号が書かれた鍵を貰い、俺は部屋に入ったが、部屋にあるのはベッド、クローゼット等、最低限の物でクローゼットの中身は当然のように何も無い訳で、結局は着替えなどを取りに自宅に一度帰還した。

「よし、こんなもんかな」

元居た自宅から衣類だとか日常品だとかを適当に持ち出し、そのついでにコンビニに寄った俺だが、アリスへのお菓子でも買おうかと思ったのが間違いで失敗だったのかも知れない。新発売の商品に手を出してしまう人間の行いは、もはや本能と言っても過言ではないだろうか。店を出たときには持ってきた荷物よりもビニール袋の方が数があり、重かった。

「四千円はやりすぎたか・・・」

そう呟き、若干ふらつきながらマンションを目指して歩き出す。新居に荷物を降ろし、一通りの片付けが終わる。俺はお菓子と飲み物が入った袋を持ってアリス宅の前までやってきていたが、ここでふと考える。

「なんて言って入るか・・・あーでも別にいいか、初対面でも無いんだしな」

取っ手に手をかけ、ためらい無く開ける。俺は友人の家に来たか

のような振る舞いで中へ入った。

「アリスー？俺だ、お菓子買ってきたぞー！」

「お菓子とな！？嬉しいねー、上がって待ってて！今行くからさ」

奥から元気な声が聞こえるのを確認した後、俺は靴を揃えてダイニングへ行く。

テーブルに袋を置いて椅子に座っていると、程なくしてアリスがやってきた・・・・・バスタオル一枚で。

「ちょおおおおおおおおおおおお！？」

「やぁ陸君。さっき振りだね？おお！お菓子！」

「待て待てぇ！食う前にすることがあるだろうが！？」

「何？」

「服を着ろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

「おお、うっかりうっかり」

やってしまった・・・。挨拶よりまずはインターホンを押すべきだった。馬鹿野郎俺！これじゃ犯罪者じゃねーか！

俺は速攻でアリスを視界から外し、頭を抱えた。というかアリスも俺が来たのを知ったんだから服を着るもんじゃないのか。

「ＯＫだよー」

「ったく・・・うっかり、じゃないっての」

純白のゴスロリを着たアリスが戻ってくる。次からはちゃんとしてくれと思うが、その台詞はそっくり返ってくるので口には出せなかった。

アリスは早速袋の中身を取り出して騒いでいる。こうして見てい

ると普通の女の子の振る舞いをするため、アリスが天使だと忘れてしまうかもしれないな、と俺は思い笑う。

「陸君、何を笑っているの？」

「いや、なんでもない・・・おい、そのデザートな、新発売だってよ？」

「じゃあボクが毒味しようじゃないかぁ・・・じゅるり」

「俺は別で買ってあるから、それは全部アリスのだよ」

「陸君だけもっと美味しいお菓子！？」

「食いつく所はそこなのかよ！？」

結局俺のお菓子（デザートだが）も半分以上アリスの物になっていた。いや、別にいいんだけどさ・・・。新商品くらいは食べたかった。

そこから無駄話やら何やらして、日没。そろそろ例の公園へ行く時間だ。

「じゃあそろそろ何か出そうな時間だし、行ってくるよ」

「ほ、本当はボクも行かないとなんだけどね。いろいろやることがあって。ああ、いそがしーい」

「ついでに散らかしたゴミも片付けてくれよ？」

「むむ・・・。仕方ないね」

「じゃ、上手いことやってみるよ」

ドアを開けて外を見る。既に暗闇が視界いっぱいに占めている、それと明かりが弱いのか、町の街灯がチカチカと消えかけている。不気味さぶっちぎりである。

「・・・・・けて」

ドアを閉める間際に、アリスが何かを呟いた気がしたが、気のせ

いだろう。俺は一路、噂の公園へと向かった。

公園へ向かう途中に気付いた事がある。先ほど見た街灯の明かりが通り過ぎる度に消えているのだ。
いちいち反応するのは面倒なので二度目からは無視して進む。

「ここ・・・か？」

程なくして一つの公園に着いた。噂される要素の無い普通の公園のようだが、本当にここで合っているのだろうか？
しかし公園へ踏み込んだと同時に、いくつかの小さな光がそこから浮き上がってきたのだ。幻想的で綺麗ではあるが、何かされるかも知れない。そう思うと若干逃げ出したくなった。

「アリス・・・？」

光が急速に集まり形成される一つの人物。それは幼い顔をしているが先ほどまでの談笑の相手であるアリスだった。しかし、その表情は至って無表情だ。

「君は・・・天使を特別だと思う？」
「え？・・・特別って、そりゃ特別だろ？特別な力を持ってるって言ってたじゃないか？」
「君と居るボクはそう言ったんだろうね。でも本当は特別じゃないんだよ」

俺と会ったときのアリスは確かに特別だと言っていた。しかし、目の前に居るアリス（魂）はそれを否定しているような口ぶりをしている。どういうことだ？コイツは何を言いたい？

「君の知っているアリスが特別だと言ったのは、自分の持つ力に対してじゃないのかな？」
「それは、どういう・・・」
「君は何故、ボクが魂を集めているのか分かる？」
「・・・力を使うのに必要だからだろ？」

俺がそう答えると、アリス（魂）はため息をついて、肩を震わせた。

「ボクが魂を集めているのは、そんな力のためじゃないよ！！」
「！？」
「確かに、力を使えばその分だけ魂を相手に分け与える。それは天使であるボクの役割だよ。でもね、ボクが望んでそれを実行していると思っていたの？」
「で、でも笑っていたじゃないか！」

俺は動揺していた。自分を生き返らせてくれたアリスは、そんな素振りなど見せていない。むしろ笑ってくれていたのだ。その笑顔が、実は仮面だったというのか？

「ボクが魂を集める理由なんて、単純なんだよ・・・」

アリス（魂）の肩が震える。表情はひどく悲しげなものに変わっていた。
そして、最も伝えたい気持ちを搾り出す。

「生きていたい・・・」

俺はその言葉にどう返していいか分からず、立ち尽くしていた。

「届けるんでしょ？魂を」

アリス（魂）がそう言うと、形成していた形が崩れ、光の玉になり俺に近づいてくる。

「早くボクに持って行ってあげてね？それまで君の中に居るからさ」

「あ、ああ」

ゆっくりと俺の中に入ってくる光は暖かかったが、どこか冷たいようにも感じた。魂が言っていた、アリスの気持ち。それを知ったことで、俺は天使の恩恵を受けたことを再認識して、彼女の待つマンションに向けて歩き出した。

アリス宅に着いたところで、ノックする俺。とりあえず今はアリスに会い、起きたことを報告する。

「ただいま」

「おお！陸君！」

そう言った途端にアリスがこちらに向かって駆けてきた。その瞬間、俺の体から光が出てきて、アリスの体へと移った。魂を回収してきたこと、魂から聞いたことを、俺は早速話をするためにアリスを座らせ、事情を話した。

「・・・お前は、ただ生きたくて魂を集めてたんだな、それとやっぱり力を使う上でも葛藤はあったんだな」

「そこまで知っちゃったのか・・・ボクとしては知られずに行きたかったんだけどねぇ。察しはつくと思うけど、それにも理由はあ

るけど聞かないでね？説明メンドー」
「いつか話してくれるのか？」
「さぁねぇ、ふふ」

俺の説明が終わっても、アリスはあまり反応はしなかった。それどころか、相変わらず笑っている。

「ただ・・・」
「ん？」

アリスの瞳が揺れている。何か重大なことでもあるのだろうかと思ったが。結局俺に背を向けただけで、何も言わなかった。

「ううん。なんでもないよ」
「そっか、じゃあ俺は部屋に戻るよ」

おやすみ、と言葉を交わして外に出る間際。またアリスが呟いたが、そのままドアを閉じた。

「無事でよかったよ・・・か。少しは自分にも心配かけろって言いたいけどな、はは」

今度はちゃんと、聞こえた気がした。

## １―４、魂の輝き（後書き）

読んでくれた方ありがとうございます。
非常に雑な仕上がりになってしまいましたが、スルーしていただければと思います。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9725q/

Re Start

2011年10月8日04時03分発行